



特集

「書く力」を高めるための指導の工夫

PISA（学習到達度調査）の結果からは、いくつかの課題が浮き彫りになりました。そのうちの二つに、日本の子どもたちの無答率の高さが挙げられます。特に、記述式設問で、日本の無答率はOECD平均を大きく上回ります。これは、成績低下以上に大きな問題であるとも言えます。



なぜ、今、
「書く力」について
考えなければいけないのか

全国学力・学習状況調査で、無答率の低かった秋田県では、日頃からどのような学習に力を入れているのでしょうか。

本特集では、秋田県での取り組みの中から、「書く力」について考えるうえでヒントになることをご紹介したいと思います。

提言

「自分の考え」と「意見交換」 そして「読むこと」と「書くこと」

秋田大学教授
阿部昇 あべ のぼる

秋田県二年連続トップクラスの理由

全国学力・学習状況調査で、秋田県の子どもたちは二年連続トップクラスの結果を残した。同時に秋田県の子どもたちの白紙回答率（無答率）は、たいへん低かった。特に国語のB問題の記述式設問で、全国平均の約二分の一の無答率であった。

理由はさまざまに考えられるが、その一つとして授業の在り方が挙げられる。一九年度生徒質問紙の中に「国語の授業では、自分の思いや考えを書くことが多いですか。」という問いがあるが、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた子どもが、秋田県は全国平均より約一〇ポイント高い。同じく「国語の授業では、友達と話し合ったり

して意見を交換する場面が多いですか。」については、秋田県は全国平均より約二〇ポイント高い。

授業で自信のない意見を皆の前で言うより、先生や成績の良い子どもの「正答」を待つて、ノートに書いたり暗記したりするほうがよい、と思っている子どもは日本では少なくないはずである。それに慣れてしまうと、面倒な記述式の設問を前にした際に「間違ってもいいから自分の考えを書いてみよう。」とは思わなくなる。しかし、まずは自分の思いや考えを書いてみる、発言してみる。それを友達と話し合ったり意見交換をしたりするという学習を多く行っていると、少々面倒な記述式設問でも、とにかくやってみよう、試みてみよう、書いてみようとするようになっていく。

何を学ばせるのかという到達点の明示化

学習課題について、子どもたち一人ひとりに考えさせたり書かせたりするためには、その時間を保障する必要がある。達成が遅い子どもには丁寧な援助も必要となる。話し合いや意見交換にも時間が必要である。まずは、四人程度のグループで意見を交換し合い話し合っていく。次に、それを学級全体に出して検討を重ねていくという指導は、教師にとって時間も手間もかかる授業の在り方である。

しかし、そういった二手間も二手間もかかる授業を構築していくことを抜きに、無答率を下げることはできない。もちろん、無答率そのもの以上に、そういった学習が子どもた

ちの教科内容獲得をより豊かにより深くすることになる。

ただし、子どもたち一人ひとりに考えさせたり書かせたり、話し合わせたりするという学習を取り入れることで、かえって学習効率を下げる危険もある。活動だけが前面に出る学びの薄い授業になってしまう危険である。こういう学習ほど、その単元・その授業で子どもたちに何をこそ学ばせ身に付けさせるかという到達点（教科内容）を明確にしておく必要がある。そして、それに基づいて学習課題を厳選し、助言や援助を多様に準備するなどの配慮が必要になる。

教師自身が授業の到達点を明確にしていだけでなく、子どもたちにも「ねらい」「まとめ」という形で到達点を示し意識化させる必要がある。子どもたちが考えてみたくなる「必然性」を感じられる学習設定、学習課題の提示も求められる。

「読むこと」と「書くこと」の有機的関連

無答率の低さは、言うまでもなく「書くこと」の力や意欲が深くかわる。しかし、今述べてきたように、自分の考えを書く、表明するということは、課題に応じて教材や学習対象を「読むこと」でもある。

一九年度中学校国語B問題で「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）が取り上げられた。その中に、この作品の「三」（極楽の場面）は「ないほうがいい」か「あったほうがいい」か、「あなたは」「どちらの意見に賛成しますか」という設問があった。どちらに賛成するかを明示したうえで「そのように考えた理由」を書かせるといふものである。秋田県の子どもの正答率は全国平均を約八ポイント上回り、無答率は全国平均のほぼ二分の一であった。

この設問は、記述式であり書く力が求められるが、それ以前に「三」の場面を自分自身で解釈し批評することが求められる。「読むこと」の力であり姿勢である。

OECDのPISAで、記述式設問の正答率の低さ、無答率の高さが問題となつたために、「記述回答率の低さ」イコール「書く力の低さ」という図式だけでとらえられることがある。しかし、「読むこと」と「書くこと」のかかわりの中で問題をとらえない限り、事態は好転しない。新しい学習指導要領では、この設問のような「評価」「批評」が明確に教科内容に位置づけられたが、その場合も「読むこと」と「書くこと」を密接に関連させなければ指導は成立しない。



阿部 昇（あべ のぼる）

1954年生まれ。茗溪学園中学校・高等学校教諭を経て、現在、秋田大学教育文化学部教授、秋田大学教育文化学部附属小学校長。著書に、『文章吟味力を鍛える—教科書・メディア総合の吟味』（明治図書／2003年）、『授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判（授業への挑戦）』（明治図書／1996年）ほか多数。

読むことや音声言語表現との関連を 図りながら「書く力」を育てる指導

秋田大学教育文化学部附属中学校教諭

濱松 寿

はじめに

生徒の「書く力」を育てるためには、相手意識と目的意識をもたせることと書く内容をもたせること、そして書くための技能を育てることが必要であることは言うまでもない。そのために私は、読むことや音声言語表現との関連を図ることを心がけている。相手意識も目的意識も書く内容も個人に委ねるような「書く」学習は、適切な指導が困難だと考えている。そこで、相手意識と目的意識、書く内容の情報源が同じであれば、共通の観点からの指導が可能となり、学力保障に結び付くと考えた。

生徒に人気の高い作品を学習するときには、必ず書く活動を設定している。その場合、書くことに抵抗感をもつ生徒は少ない。そして、単元に合わせた「書く」学習を仕組み、さまざまな文章の書き方を能動的に学ばせるのである。さらに、「書くこと」の取り立て指導においても、共通に学ぶことができる学習材を活用することを心がけている。

1 書くことで、楽しく文章理解を深める実践

使用教材

「学びて時にこれを習ふ——『論語』から——」（三年）

中学生は、古典が大好きである。特に論語は、訓読の平易

な学習材であり、その内容は現代にも通じるものが多く、決して遠い時代・世界の話ではない。孔子の言葉はごく身近な世界に息づいていることを実感させるために、単元の最後に「書く」活動を取り入れている。

生徒は好きな論語を引用して自分の意見をまとめたり、論語を基にお話作りをしたりする。このことで、生徒は孔子の言葉と自分の生活とを関連付けて考え、一層の理解を深めていく。結論を論語で表現するので、楽しみながら書くことができる。（P8資料1参照）

まずは、各自に好きな論語を一つ選ばせる。そして次の二つの課題を提示し、最後に、二つの課題を貫くテーマを決めて文章を書き進めていく。分量は四百字詰め原稿用紙一枚である。

課題1

選んだ論語に当てはまる身近な体験を具体的に書き、その体験について自分の意見を「論語」の言葉を引用して書きましよう。

課題2

選んだ論語に関係したお話を作りましよう。
（生徒に示した例文）

昔々、ある村に百五十歳のおじさんがおりました。村人は、明日の天気や政治のことなどいろいろなことを相談に行きました。

するとおじいさんは、この村の過去の出来事を記録した分厚い歴史の本を開き、現在の村の状況と照らし合わせて、いつも正しい予言をしました。

村人はおじいさんを「師」と呼び尊敬しました。

資料 1

字	実践するから楽しい
ある先生が言	た。今学習してゐるのは
世の中がどう変化して来たか	そして今、ど
のような世界が広が	つてゐるのだ。と。つま
り、学習を勉強としてゐる	のではなく、自分
の生きろ術としてゐる	ということだ。
学習というのは頭に詰め込	みただけでは楽し
くない。学ば	て時にこれを習ふ、また説
くらずや、世の中で実践して	どを楽しいのだ。
勉強が人から嫌	いだ。そう思つてゐた僕は、
もういない。	
何をや	つても勉強が身に付かず、焦りだけ
が先走	つた三年の夏休み、しかし、何気なく
見てゐたニ	ュースで自分の間違ひに気付いた
世の中で生	きていくために、今自分は学ん
でゐるのだ	と。昔わからずか
つた世界情	勢がわかる。難しい本も読める。それ
の僕は勉強を	楽しめるようになった。そして
今、僕は高校	生活を目一杯楽しんでいる。

▲ 資料2(学習の手引き)

平家物語シート7 組 番 名前

どんな内容で、自分のグループの討論の柱にするのか決まるといい。立論は「プレゼンテーション」として示さなければならない。それ以外の原稿を見せよう。

反論側へ、自由で質問の人は、質問や意見を交わすことと求められよう。各項目の内容を準備せよ。

最後は討論と閉幕は、「プレゼンテーション」原稿を基に、討論の状況から何を訴えるのが効果的か判断するところ。各項目の内容を準備せよ。

「討論の要綱」となる「演題」の場面は、「演題者」の場から続いていく場面である。

二、平家が源氏を降参したのはどうしてだったか。

三、源氏が平家の桃畑にのつたのはどうしてだったか。

四、「那須ヶ丘」の場面は、平家り降参したと誤り記されていること。

六 調経は、なぜ、毎一に舞を
七 「原稿毎一」の場面では、お
て義経に叱責され、意を決し
うことなく、舞を舞い始めた
それぞれの原稿が完成したら、
エックをしよう。

[illegible]

▼ 資料3(討論の過程)

2 思考するために、書くことの能力を育てる実践

使用教材

「扇の的——『平家物語』から——」（二年）

「提案のしかたを工夫しよう プレゼンテーション」(二年)

古文を読む学習にプレゼンテーションを取り入れた討論学習の実践を紹介する。

平家物語の人氣は高い。「那須与二」の一節の歡喜の場面が、「弓流し」では、一転して緊張感が高まつていく。生徒の意見は二つに分かれるものの、「情けなし」派が圧倒的である。ここで、「あ、射たり」派と二つに分かれて、単元の終わりに討論の学習を実施している。この場面を、歴史的な背景も含めて、自分の立場とは別の視点から読んでいくことで、複眼的な読みの学習にもつながる。

また、討論においては、立論に重きを置き、立論部分にプレゼンテーションを取り入れて実践を行っている。立論にプレゼンテーションを取り入れると、反対尋問が立てやすいというメリットもあり、論理的な討論になる。「源平合戦図屏風」や「平家物語絵巻」に描かれている様子を立論の根拠としたり、当時の武家社会のきまりなどを根拠にしたりと、自分の興味・関心のある事柄を基にプレゼンテーション作りが行われる。説得力のある話し方や資料の提示のしかたよりも、立論から最終弁論まで論の柱が一貫しているかを、勝敗の判定の中心とする。すると勝敗よりも根拠のおもしろさに引かれて、ますます平家物語が好きになっていく。

「書く」学習では、プレゼンテーションのための発表原稿を書く活動が中心となる。相手を説得する決め手となる事柄を各

3 近代作家の名作を楽しく読み進めるために書く実践

使用教材

「わかりやすく説明しよう
情報を選ぶ」(二年)

次は、短編小説を使って楽しく書く力を育てる実践である。もちろん読解力がものをいう。四人グループで、ニュースキャスター役とコメンテーター役、リポーター役に分かれて、小説の場面を状況中継するという設定の学習である。共通の学習材を活用して情報を収集することが可能になれば、個々への指導が的確になると考えた。

まずは、報道番組をリサーチし、ニュースキャスター、コメンテーター、リポーターの役割とアナウンス原稿の書き方を確認する。次に、小学校四年生で学習した「『こんぎつね』」を使って、どの場面をどのように実況中継し、アナウンス原稿に起こしていくかグループで話し合い、原稿を完成させる。最後に発表会で「『こんぎつね』の実況中継を楽しむ。『こんぎつね』でだいたいこつをつかんだところで、いよいよ本番。近代作家の名作を取り上げる」とする。

題材は、短編でありながら展開がドラマチックな「蜘蛛の糸」を活用する。主人公が蜘蛛の糸をよじ登り、その後お釈迦様の怒りを買って、地獄へ真逆さまに落ちていく場面が実況中継の中心となった。二人のリポーターが、天国と地獄にそれぞれ分かれ、主人公とお釈迦様の様子をリポートしたり、ヘリコプターに乗りながら、リアルタイムで主人公が地獄に落ちるまでの様子をリポートしたりするなど、さまざまな工夫が見られて、本当に楽しい学習である。(P10資料4参照)

資料 4

資料 4: 授業記録の断片。右側には「実践提案 ①」の表紙が見え、左側には「実践提案 ②」の表紙が見える。表紙には「実践提案 ②」のタイトルと「実践提案 ①」のタイトルが記載されている。授業記録の断片には、生徒の発言や教師の指導が記されている。

資料 5

資料 5: コピー作文の断片。右側には「実践提案 ①」の表紙が見え、左側には「実践提案 ②」の表紙が見える。断片には「コピー作文に挑戦！」というタイトルと、生徒の作文が記されている。

4 作品のよさを伝えるために書く実践

使用教材
「走れメロス」(二年)
「読書活動 読書紹介をする」(二年)

「走れメロス」も生徒に人気の高い作品である。四つの大きな場面に分かれるが、どの場面も登場人物の言動についての意見が分かれる深さをもった作品である。そういった作品の特徴をとらえ、各場面に一つずつ課題を設定し、討論を通して読み深めていく。ここで工夫を加える。議論の仲となり、ともすれば自分の主張にこだわり、他者の意見についての理解がおろそかになりがちなので、自分の立場を変えた友達の考えや、立場は変わらないにしても説得力があると感じた考えなどを振り返ってメモをさせる。

そして一通り学習を終えたあとで、この作品のよさをコピー作文で伝える学習を設定する。普通の読書案内やポップでは、取り上げる場面やコピーの表現が同じようなものになりやすい。そこで、「討論の過程で、自分が最も心が揺れた場面をコピー作文にしよう」という課題を提示した。ここで討論の際のメモを活用する。コピー作文には、メモをした友達の考えと、その友達の名前を必ず盛り込むことを条件とした。この学習では、ボデイ・コピー作りを重視する。前述の内容を盛り込むことで、読み手に説得力のある文章表現を練ることになる。

最後に、この作品を多くの人の手に取ってもらうには、どのコピー作文がよいか検討し合い、各グループの代表作品を紹介し合う。学習の足跡を振り返り、互いの学びのよさを認め合える学習となる。(P11資料5参照)

阿部昇先生からのコメント

■文学を「読むこと」から「書くこと」への必然的発展
濱松先生の実践提案は、いずれも「読むこと」と「書くこと」の指導が必然性をもって関連付けられている。「論語」では、読み取りの単元の最後に「身近な体験」「お話」作りを位置づけている。「平家物語」では、同じく読み取りの延長線上に「あ、射たり」「情けなし」のディベートを設定し、その中に書くことの指導を位置づけている。「平家物語シート」(P9資料3)を見ると、その読みの指導過程が見えてくる。「マングツネ」「蜘蛛の糸」と「走れメロス」では、「実況中継」「読書紹介」という形で、「読むこと」と「書くこと」を丁寧に結び付けている。

こういう形で「読むこと」との関連の中で「書くこと」の指導を行っていくことで、二つの分野の指導の有機的関連が図られる。

■「評価」「批評」的な「読むこと」「書くこと」指導

濱松先生は、「平家物語」の「扇的」の終結部にあたる「五十ばかりなる男」の射殺に関して、「あ、射たり」に共感するが、「情けなし」に共感するかを、生徒たちに論じさせている。これは、今回新たに中学校学習指導要領の国語に位置づけられた「評価」「批評」につながる指導である。また、「蜘蛛の糸」の「実況中継」は、語り手や視点を変えるという形で「批評」的指導になっている。さらに「走れメロス」についても、メロスは「自分勝手」かどうかをめぐって「議論的仲」となっている。それらの点でも濱松実践は、先進的と言える。



「書く力」につなげる指導の工夫

秋田市立泉中学校教諭 工藤 隆くどう たかし

はじめに

生徒たちの可能性を引き出し、生徒たちに確かな言葉の力を付けたい。それが国語教師としての願いである。そのために、日常の実践の中で少しでも創意工夫していきたいと考えている。ときには教科書を離れて自分で単元を構成したり、教科書教材の発展学習を工夫したりしながら実践を重ねているところである。

さて、生徒たちが書く（表現する）力を身に付けるためには、次の三つが不可欠ではないかと考える。

- ① 生徒たちが書きたい（表現したい）という意欲をもっている。
 - ② 生徒たちが書く（表現する）ための内容をもっている。
 - ③ 生徒たちが書く（表現する）ための技術をもっている。
- 次に述べるのは、そうした書く（表現する）力を身に付けさせるための日常のささやかな実践である。

1 論説文の読解から「書くこと」へつなげる実践

使用教材

「生き物として生きる」（三年）四時間

(1) 身の回りの問題に結び付ける学習の工夫

理由や根拠を明らかにして論理を展開する論説文「生き物として生きる」の読解の最後に、「書くこと」の教材「説得力のある文章を書こう」の学習につながる表現活動を二時間設定した。理由や根拠を明らかにして論理的な文章を書いたり話したりする力の育成は、各種調査で問題になっている表現力や思考力の向上につながる。「読むこと」と「書くこと」の関連学習を行うことにより、次に予定している「書くこと」の学習の導入も兼ねたいと考えた。

さて、「生き物として生きる」では、生物学者である筆者が、機械と同じように生き物（人間）までも「思いどおりに」作ろうとすることに歯止めをかけ、人間も「生き物として生きる」暮らし方を考える必要があると説いている。この学習を通して、現代社会の抱えている諸問題に、自分たちが密接にかかわっているのだということに自覚させたい。そして、自分はそのように対処していくのかということ、身の回りの生活と関連させて真剣に考えるような題材を設定した。

また、生徒たちは、総合的な学習の時間に「食と健康」や「環境問題」をテーマに学習してきた。それに加えて、食に対する関心が高まってきている状況を考慮し、「遺伝子組み換え食品」

を例として考えながら、自分の立場を明らかにして根拠を挙げて考えを述べる学習を設定した。

(2) 「書くこと」の授業の実際

① 学習目標

立場をはっきりさせ、理由や根拠を挙げて意見を述べよう

② 主な学習活動

○ 本時の課題を確認する

○ 「遺伝子組み換え食品」について考える

- ・ 「遺伝子組み換え」に関連した食品を発表し合う。
- ・ 食品の包装に書かれてある「遺伝子組み換え」に関連した説明（資料1参照）を発表し、確認する。
- ・ なぜ「遺伝子組み換えでない」というような内容が書かれているのかを考え、話し合う。

○ 前時までの内容を簡単に振り返る

・ 「生き物として生きる」の内容をキーワードの確認で振り返る。

○ 「遺伝子組み換え食品」について理解する

- ・ 現状が分かる補助資料を読み合う。

○ 論理的な文章の展開を確認する

- ・ 立場、根拠、主張を述べる文型を確認する。

○ 「遺伝子組み換え食品」の生産について、自分の考えをまとめる（P14資料2参照）

- ・ 自分の立場（促進派・抑制派）を決める。
- ・ 根拠・意見をメモする。
- ・ 自分の考えを原稿用紙にまとめる。

○ 意見文を発表し合う

◀ 資料1 「遺伝子組み換え」に関連した食品（実物）の包装から

ア 納豆

① 原材料名 大豆（カナダまたはアメリカ）（遺伝子組み換えでない）

② 注・原料大豆は表示の原産国の大豆を適宜切り替えて使用しております。

イ 豆腐

③ 遺伝子組み換え大豆は使用していません。

ウ スナック菓子

遺伝子組み換え原料の混入を防ぐため、分別流通されたとうもろこしを使用しています。

(3) 作文

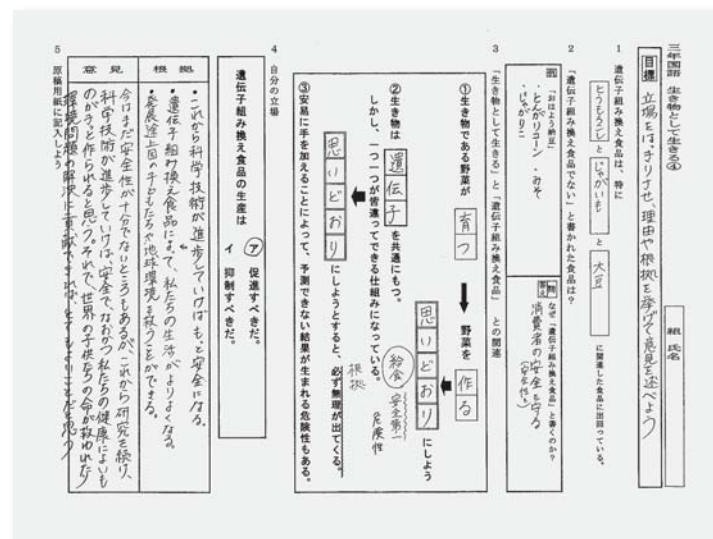
次の文は、抑制派の生徒が書いたものである。

私は遺伝子組み換え食品の生産を抑制すべきであると考えている。なぜなら、主婦は誰よりも食の安全に気を遣っており、何が起るか分からない危険性のある遺伝子組み換え食品を好んで買う人はあまりいない、という話を母から聞いたからである。私も、自然な生き物や食べ物に人間が手を加えることで危険性が高まると感じる。だから、「生き物として生きる」の中で筆者が言っていたように、思い通りにしようとする気持ちをいろいろなものに当てはめてしまうのは間違っていると思う。

しかし、発展途上国においてのワクチン摂取の有効な手段としての遺伝子組み換え食品の開発などの研究は人類の役に立つものとして慎重に行っていくべきだと思う。いずれにせよ、確かな情報を消費者に示してくれることを願っている。

(4) 学習を終えて

食品偽装問題や中国の冷凍食品問題によつて、「食の安全」に対する関心が高まっているところでこの学習を行った。論説文指導においては、論説文で読み取ったことと身近な問題を関連付けながら、生活の中で生きて働く表現力の育成を図ることも時には必要なことであろう。そのためには筆者の主張の内容や論の進め方をきちんと理解することが大切だということを改めて感じた。



▲ 資料2

3 生き生きとした文章を書くための実践（行事との関連）

オリジナル單元

「思い出スナツプ」(一〜三年)

本校で、宿泊学習や文化祭など、イベントが終わったあとに全学級で、「思い出スナップ」を書くことにしている。これは、B5かA4サイズの用紙に、イラストとともに、自分にとって印象に残った思い出を自由に書き出したものである。

自分の思つたことを効果的に伝えるには、表現の工夫が大切だ。例えば、書き出しを疑問文や会話にする。クライマックスの場面や印象に残つた言葉から書き始める。前掲の「ここを聞いて」の学習などで引用した表現をここで生かすという生徒も出てくる。そうすることで、最初の一文から読者を引きつけることが可能になる。時には、「書き出し」を指定して書かせてみることもいい。

次の文は、一年生が十一月に行った「なべっこ集会」の「思い出スナップ」の文である。国語の時間で「書き出し」を①「やったー」②「たいへんことが起こった。」の二つから選ばせ書かせてみた例である。

「やったー」私は声を上げた。とてもおいしいそうな豚汁ができたのだ。『はやく食べたい』そう思った。みんなもそう思ったはずだ。食べてみると、温かくて野菜もたっぷり入っていて、予想通りとてもおいしかった。いつもはぶざけている男子も今日ばかりは真剣に取り組んで作った、そんな豚汁だ。おいしくないわけがない。私は、協力すると何でもうまいくんだと実感した。

2 読者を引きつける文章を学ぶ実践（読書紹介との関連）

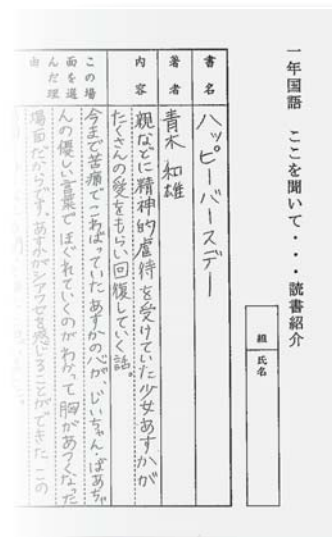
オリジナル單元

「ここを聞いて」(一年)

読書後に、読書記録を書く活動を行うことは多いと思うが、そこから朗読につなげるという学習を行ってみた。それが、一年の「ここを聞いて」という読書紹介である。

本校では、自由読書を基本としながらも、同じ本（『首導犬クイルの一生』、『佐賀のがばいばあちゃん』、『ころ』など）を学級全体で読む集団読書を行うなど、工夫しながら毎朝二十分間の朝読書を行っている。そこで、「友達に紹介したい本を一冊選び、その中から一場面を選び、朗読で紹介する」という学習を行った。

これは、新しい学習指導要領の「第一年、2内容、C読むこと②言語活動例ウ 課題に沿って本を読み、必要に応じて引用して紹介すること」に該当する学習ではないかと考えている。そしてこの学習を通じて、生徒たちは、知らず知らずのうちに、読者を引きつける文章を学ぶことになる。(資料3参照)



▲ 資料3

そして、書き終えたら必ず読み返す習慣をつけさせたい。一文一文を短くし、文末が同じような表現の繰り返しにならないように注意を払うようにできるといい。

最後になるが、新しい学習指導要領では、言語活動の工夫と充実が重要視されている。国語教師として、学校全体の教育活動の中でどんなことができるかを常に考え、実践していく姿勢を今まで以上にもつていきたい。

阿部昇先生からのコメント

■説明文を「読むこと」から「書くこと」への必然的發展

工藤先生も、濱松先生同様、「読むこと」から「書くこと」に指導を必然的に発展させている。「生き物として生きる」では、丁寧な読み取りの最後に「説得力ある文章を書く」という学習を位置づけている。「生き物として生きる」と関連させながら「遣伝子組み換え食品」についてリサーチをさせ文章を書かせている。

■「評価」「吟味」的な「読むこと」「書くこと」指導

工藤先生は、「生き物として生きる」の読み取りから「遺伝子組み換え食品」の書くこと指導に発展する際に、「評価」「吟味」の観点を明確に打ち出している。「遺伝子組み換え食品」について、「促進」か「抑制」かを子どもたちを選択「評価」に深くかわかる先進的な観点である。